（様式１－１）

令和５年度　学校評価報告書

大牟田市立大牟田中央小学校　（ＮＯ１）

学校教育目標	豊かな人間性をもち、主体的に考え行動する子供の育成	重点目標	自ら学び挑戦できる子供の育成 ～「一体感(みんなで！)」「納得感(なるほど!)」「達成感(できた!)」を大切に～

	評価計画				自己評価		学校関係者評価		改善計画
	重点目標	目標達成のための方策（取組指標）	成果指標	評価	結果（成果○と課題△）	評価	コメント		次年度における改善策（案）
重点目標に関する評価	主体的・対話的に学び合う力の育成 【学力向上】	学力向上プランの計画に基づいた実施と点検を学期に２回実施 ・授業チェックリストの実施 ・校内研修会で軌道修正	・令和6年度全国学力・学習状況調査（国語科・算数科） →全国平均正答数以上 ・市販テスト平均点→８０点以上 ・チェックリスト「活用力を高める場（記述力を高める問題集の活用）を設定する。」による教師評価４段階中３以上	3	○　１年間を通して、校内研究に学年、近接、学校全体など様々な形態で取り組んできたことで、教師の授業の進め方や子供たちの学習の取り組み方などをある程度統一することができた。 △　全国学力・学習状況調査では、全国平均まで行かなかった。基礎・基本の定着が不十分であった。活用力を高める問題集等の活用も不十分であった。 ○　週案への記載は全担任が記入したことで見通しをもって授業に取り組むことができた。チェックリストの評価も3.5と高い意識で取り組むことができた。 ○　研究授業を重ねる度に、本年度重点的に取り組んできた「自分の学びを自覚する活動」に広がりや深まりが出てきた。	A	・　学校の評価は妥当である。 ・　取り組みの成果のあったクラス等の取り組みについて分析し次年度への学校全体の取り組みの参考にしていくことが必要かと思う。 ・　「対話活動を仕組む際の、場の工夫や発問の工夫をさらに深めていく必要がある」という課題が挙げられていたが、参観したクラスの全授業において、教師は児童の表情を見ながら間答形式で進められており、考えを導いて発言させる授業風景が見られた。また「自分の学びを自覚する」というテーマについて、児童の個性や学習に取り組むそもそもの習熟度が様々な中で成果を上げるのは大変難しい事だと思うが、個々の振り返りに重点をおくという着目点が良いと思う。昨年同様、授業の質を高める為に先生方が研鑽を積まれている成果も現れていると感じる。どの教室でも要点を整理した美しい板書にも目をひかれた。次年度における改善策にも同様の課題が挙げられているので、学校全体で一丸となって取り組まれ、なお一層深い学びに繋がることと期待している。 ・　先生方の授業への取り組み方と工夫が児童達に浸透して、自分の学びを自覚する活動の広がりという成果につながっていると感じる。一方で、改善計画にあるチェック機能の強化など、先生の業務負荷増につながることを危惧している。授業を見て、先生方の導きはすばらしいと感じている。そのままの姿勢で継続されていけば結果はついてくると思われる。	・　学力向上プランをさらに意識して日常の授業に取り組むために、年に２回点検するだけでなく、毎月のチェックリストを記入する時間など、定期的に学年で確認する時間を設ける必要がある。 ・　子供たちがさらに学びの達成感や納得感を味わうことができるように、「考えを練り上げる時間」の詳しい発問の仕方や子供たちの活動方法などを吟味していくために、学年会を活用した教材研究の時間を優先的に設定していく必要がある。
		１単位時間で働かせる見方・考え方や、習得する具体的知識・技能を事前に明確にして授業に臨む。	・週計画案に１単元時間で働かせる見方・考え方を記入し、月に１回のチェックリスト「働かせるべき見方・考え方と身に付ける知識及び技能を週案に記載する。」による教師評価４段階中３以上	3		A			
		見方・考え方を働かせ「自分の学びを自覚する活動」を位置付けた授業改善を行う。	・授業場面の設定「児童自身に学びの変容を自覚させるための工夫がなされている。」教師評価４段階中２．８以上 ・児童アンケート「まとめを自分の言葉で書くことで，授業で学んだことを明らかにできた。」による評価４段階中３．６以上	4		A			
	良好な人間関係の構築と豊かな心の育成 【心の教育】	学年に応じた挨拶の徹底 低学年：元気よく 中学年：進んで・立ち止まって 高学年：進んで・立ち止まって・笑顔で	児童アンケート８０％以上 「学年に応じた挨拶をする。」による評価４段階中教師評価３以上	4	○　低・中・高でそれぞれキーワードを設定して取り組んだことで、子供が意識しやすくなり、少しずつあいさつの質の向上が見られた。 ○　各洋室での取組と給食中の放送等を活用して意識づけをしたことで、同学年や下級生に対してやさしい言葉かけをする児童が多くなった。 ○　学級の課題に向き合い、話し合う習慣ができ、解決に向けて自他が納得する話合いを行うことができた。	A	・　学校の評価は妥当である。 ・　６年間において成長の差は大きいと思うので低学年、中学年、高学年と分けて目標設定をすることも考えてみてはどうかと思う。 ・　学校を訪れた際、低学年から高学年までどの児童もよく挨拶をしてくれる。校内を校長先生・教頭先生が回られると、児童達が寄ってきて、自分の話を元気いっぱいにしている場面をよく見かける。先生との信頼関係が普段の関わりの中でしっかり築かれていると感じる。また、地域見守り隊の方々へ児童のお礼を綴ったファイルを贈るなど、校内だけでなく、地域の人たちとの交流も大切にされていると感じる。高圧的な態度の先生をみかけない。これはほかはか言葉を推奨するのにとても重要なことだと思う。挨拶、ぽかぽか言葉をしっかり身に付け、自他の違いは当たり前と受け止め、尊重できる心があれば自己肯定感を高め、いじめに繋がりにくいとも思うので、より一層の成果に期待している。 ・　青パト時に廻っていると挨拶や頭を下げてくる子供を見かけるようになった。 ・　友達のよさを互いに認め合う活動は大切である。人をけなしたり、悪口を言うことは簡単だが、反対は成長するにつれその感覚を養うことは難しくなる。成果が出るのが楽しみだ。 ・　挨拶はすばらしいので何も言うことはない。	・　自分の気持ちが相手に「伝わる」ために、元気なあいさつをまずは意識した活動を継続していく。また、運営委員会のあいさつ運動やあいさつのスーパースターを紹介する活動を通して、大牟田中央小が目指す３Ｓ（進んで・ストップ・スマイル）のあいさつを全員が身に付けていく。 ・　朝や返りの会等の時間を活用した友達のよさを互いに認め合う活動を仕組み、誰とでも関わりをつくることができるようにする。
		やさしい言葉遣い ・名前の「さん」付け ・ぽかぽか言葉の推進	児童アンケート８０％以上 「優しい言葉遣いをする。」評価４段階中教師評価３以上	3		A			
		学級会での自他の考えを尊重した話し合い ・発表者の方に体を向ける。 ・理解したことはうなずく。	児童アンケート８０％以上 「自他の考えを尊重した学級会（話合い活動）にする。」評価４段階中教師評価３以上	3		A			
	粘り強く取り組み続ける力の育成 【運動の質と量の充実・技能・体力の向上】	体育の学習の準備体操において、柔軟性を高める運動の実施	児童への「準備運動では、柔軟性を高める運動を取り入れていますか。」聞き取り調査 「取り入れている」「大体取り入れいている」と回答した児童８０％	3	○　体育の学習では、大牟田っ子ストレッチを取り入れて準備運動ができた。 ○　学力向上における週計画案の実践から運動量を意識した授業改善ができた。 △　子供たちは意欲的に参加できたが、金曜日の体力アップタイムが祝日や学校行事により実施できないことが多くあった。 △　体力テストの課題のもたせ方の工夫が足りず、達成まではいかなかった。	A	・　学校の評価は妥当である。 ・　体力アップを目標するよりは、運動が楽しいと感じさせ、楽しみながら取り組む工夫をしてみてはどうか。それが将来、運動習慣を身に付けることにつながるかと思う。 ・　金曜日の体力アップタイムが祝日や行事により実施できない事が多かった、との事。又、貴校に限らず、あまり体を動かしたがらない子供が増えているので、次年度への改善計画をもって一層の取組みを期待している。 ・　最近の子供たちは、体力不足という指摘があるので、外でもっと運動させる工夫をしてほしい。 ・　体力アップは子供たちがいかに楽しく取り組んで、成果を実感し、また運動したくなるの繰り返しかと思う。ただ、どうしても運動が苦手、能力が上がらない子供もいるかと思うので、運動以外にフォーカスすることも大事である。	・　体力アップタイムの内容は体育行事と関連付けて計画的に実施していくことを継続していく。 ・　金曜日の体力アップタイムが祝日や学校行事により実施できなかったので、来年度は水曜日を体力アップタイムの日として設定し，児童の運動時間の確保を図る。 ・　週案に新体力テストの結果と課題に対する運動例等が掲載された紙を貼り付けて，体育科の学習計画において教師の課題意識を高めることを継続していく。 ・　遊びの効果と体力テストとの関連を早めに子供たちに紹介するようにする。
		授業での1単位時間のうち、３０分以上の運動量の確保（主運動に繋がる動き「やってみよう」の充実）	児童への「体育科の学習において、30分以上の運動ができていますか。」聞き取り調査 「できている」「だいたいできている」と回答した児童８０％	4		A			
		体力アップタイムの継続的な実施 ・短なわのできそうな技に挑戦する。 ・長なわの学級の記録に挑戦する。	苦手なことにも挑戦する気持ちを持ち続けて参加する児童１００％	4		A			
		新体力テストの課題解決に向けた遊びの紹介と学級での実施	児童への「来年の体力テストの記録向上に向けた取り組みをしていますか。」聞き取り調査 「している」「大体している」と回答した児童８０％	3		A			
いじめ	早期発見・早期対応 「しない・させない・見逃さない」指導体制の機能化	学校生活アンケート・いじめアンケートの活用	アンケート実施後、個別の教育相談を実施し、いじめに関する場合は聞き取った情報を基に早急に対応する。→100%	4	○　アンケート後はすぐに教育相談をして実態把握に努めたことで早期解決ができている。保護者アンケートは記述欄が具体的な情報を知る上で有効だった。 △　「子供を見つめる会」では，口頭での情報交流はできたが、データ入力は全学級とはいかなかった。来年度は対応後にすぐ入力することを徹底したい。	A	・　学校の評価は妥当である。 ・　アンケートの実施はもとより子供を見つめる会を活用し教師のいじめを見抜く力を育てる取り組みをしていくことも必要ではないかと思う。 ・　アンケート後すぐに教育相談をして実態把握に努めたことで早期解決ができているとの事。また、記述式の保護者アンケートの実施は良いと思う。昨年に続き「子供を見つめる会」の取組みの重要性を感じ、高く評価する。 ・　なかなかなくならないが、家庭でのしつけが必要である。学校だけに任せていては駄目である。 ・　アンケートを実施する前にアンケートを行う目的の明確化、アンケート実施によって達成したいゴールを設定することが大事で、自己概念の低迷に歯止めをかけたいことが目的であるならゴールは何だろうと感じた。	・　早期発見・早期対応のためにアンケートはすぐに確認し，迅速な教育相談を継続して行っていく。 ・　「子供を見つめる会」の内容は，口頭説明のみにならないことと確実な引き継ぎのために引き続きデータでの記録の徹底を行う。
		「子供を見つめる会」での共通理解及び保護者との連携	いじめにつながる情報に対しては、全学級データ入力を行い、迅速に保護者と連携する。→100%	3		A			
		保護者アンケート（チェックリスト）の活用	チェックリストに記載のある内容には、確実に保護者に聞き取りを行う。→100%	4		A			
不登校	早期対応	福岡アクション３による不登校未然防止のアクションの確実な実施	欠席3日で早期の家庭訪問，保護者面談の実施→100%	4	○　１年間を通して欠席児童への電話連絡を徹底した。欠席の多い児童は家庭訪問も行った。 ○　ＳＣとの相談を全学級で行い，対応等の助言をいただけたことが早期対応につながった。 △　連休後や月曜日の行き渋りが減らなかったのは、家庭との事前の連携が弱かったことが課題に挙げられる。来年度は事前の連携を深めたい。 8～29日:13.2% 30日以上:3%	A	・　学校の評価は妥当である。 ・　成果指標の中で不登校生徒の数を成果指標にすることは無理があるのではないかと思う。今後もぜひＳＣ、ＳＳＷの活用をお願いしたい。 ・　当該児童、家庭の苦しい気持ち・状況に寄り添った想いをもって対応されており、またSC・SSWへの相談を全学級で行い助言をもらう活動を高く評価し、学校として出来る対応を十分されていると感じる。にもかかわらず、欠席児童数が減らないことは、家庭の中まで入れない学校対応の限界だと感じる。また、熱心な取り組みでも改善出来ない成果を真摯に受け止め、ありのまま自己評価されている学校の姿勢を高く評価する。 ・　仲間づくり、友達づくりが必要。学校が楽しいと思わせる工夫も必要である。 ・　不登校の理由は学校生活でのトラブルがあげられるが、不登校の原因で最も多いのが無気力である。前者なら対処もできるが、後者は家庭内の問題もあろうかと思う。あまり高い目標を設定する必要はないと思う。	B	・　引き続き，福岡アクション３を確実に実施し、子供の様子を把握する。 ・　「学校が楽しい場所」となるような学習面では「できた」を増やし、生活面では「易しい言葉づかい」の取組を充実させていく。 ・　不登校や行き渋り児童に対して，担任のみにかませるのではなく，専門機関のアドバイスもいただきながら、全職員でかかわっていくという協力体制を継続していく。
		８日以上欠席児童へのマンツーマン対応等、きめ細かな対応の組織的、継続的な実施	８～２９日欠席児童数 児童数全体の５％以内 （※６月末時点で３．２％） （１１月末時点で８．５％）	2		A			
		ＳＣ　ＳＳＷ等の積極的活用	ＳＣ　ＳＳＷ等への相談後、担任・管理職等への確実なフィードバックを行う。→100%	4		A			
働き方改革	教職員の心身の健康維持	週に１回，各自で設定した定時退校日に向け効率的な業務の調整を行う。	週に１回の定時退行日を達成できた職員→100%	2	△　週に１回の定時退校日の設定を各自で行ったことが逆に決断力を鈍らせる結果となってしまった。 ○　毎週金曜日は、なるべく会議や研修等行わず、同学年会や週案作成の時間を確保できた。	A	・　学校の評価は妥当である。 ・　時間外勤務の短縮は働き方への意識の変革が一番大切かと思う。今後も継続的に取り組むことが大切かと思う。 ・　昨年同様、なかなか改善に繋がらないのは、学校の熱心な取り組みだけでなく、現場に課せられている仕事の多さがこれ以上減らせないようで、一学校だけで解決・改善できる問題ではないのかも、と推察する。とはいえ、教職員の心身の健康維持は職務遂行において最も重要なことなので、今後も何とか改善されるよう願う。 ・　余裕をもつこと。あまりにも忙しすぎる。 ・　医療や運送業は、働き方改革が加速しているが、学校の先生はやるべきことが多すぎる。だからといってイベントを削るわけにもいかないので、時間削減にも限界が来ていると感じるし、学校単体では厳しい問題である。	・　全員で一体感を味わうために定時退行日の曜日を決めて、それに向かってタイムマネージメントを考えた実践に取り組んでいきたい。 ・　業務の在り方を見つめ直すために，ＩＣＴ機器を有効に使い仕事量の軽減と効率化を行う。
		退校時刻を遅くとも１９時３０分に設定する。	定時退行日以外で、19時30分の退行時刻を週に１回以上達成できた職員→100%	3		A			
		毎週金曜日は、なるべく会議や研修等行わず、同学年会や週案作成の時間を確保する。	金曜日の同学年会や週案作成を確実に実施した職員→100%	3		A			

◇　評価について　・【自　己　評　価】　４：目標達成（９０％以上）　３：ほぼ達成（７０％～９０％）　２：もう少し（６０％～７０％）　１：できていない（６０％未満）

・【学校関係者評価】　Ａ：自己評価は適切である　Ｂ：自己評価は上方修正すべきである　Ｃ：自己評価は下方修正すべきである